

紀 要

第 18 号

2005. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

石器構成からみた関西縄文社会における通年定住戦略の拡散過程

瀬 口 眞 司

1. 論点と概要

日本列島は中緯度温帯に位置する。そのために四季があり、折々の旬の食物を楽しむことができる

しかし一方で、季節によって食料資源量は変化し、食料の欠乏期も生まれる。食料資源の変化を生み出す季節の移ろいは、対峙すべき「宿命」なのである。

この宿命を乗り越えるために、いくつかの生業＝居住戦略を縄文社会は開発した。

その一つは「季節的定住」である。食料資源の季節的変化に合わせて居住地を移し、旬の食料のあるところを求めて移動を繰り返す。また、何らかの工夫により年間の食料資源を確保し、その地点で「通年定住」する戦略もある。

かつて筆者は、各遺跡の遺構構成パターンや、定住度の高まりを促すとされている貯蔵量の推移を検討し、縄文中期後葉に、関西地方では通年定住がより普遍化したと「主張」した¹⁾。

ところで、縄文時代の食料確保活動を担う道具として、石鏃や石錘、磨石類や打製石斧などがある。

各遺跡のそれらの石器構成の偏りを概観すると、2つのパターンに区分できる。特定器種に偏りがちな「一器種突出型」の遺跡と、偏りの少ない「複合型」の遺跡である。

その道具立ての偏り具合からみて、「一器種突出型」遺跡の周辺で行われた食料確保活動は、より偏っていたと想定される。一方で、「複合型」遺跡周辺で行われた食料確保活動は、より多角的・複合的だったと考えられる。

このうち、「一器種突出型」遺跡の多くは、季節的定住戦略の結果として生まれた可能性が高い。というのも、食料資源の内容と量の季節的变化に応じて移動し、逗留地点とその旬に適した活動をすると、各地点の石器構成は偏りがちになるからである。

一方で「複合型」遺跡は、通年定住戦略が残した可能性が高い。というのも、同一地点に通年定住しながら食料資源の季節的变化を乗り越えると、様々

草創期	
早期前葉	ネガティブ押型文
中葉	ポジティブ押型文
後葉	条痕文
前期前葉	羽島下層Ⅰ式
中葉	羽島下層Ⅱ式～北白川下層Ⅱa式
後葉	北白川下層Ⅱb式～大歳山式
中期前葉	船元Ⅰ式
中葉	船元Ⅱ～Ⅳ式
後葉	黒木Ⅱ式～北白川C式
後期前葉	中津式～北白川上層式Ⅱ期
中葉	北白川上層式Ⅲ期～元住吉山Ⅰ式
後葉	元住吉山Ⅱ式～宮滝式
晩期前半	滋賀里Ⅰ～Ⅲa式
後半	篠原式～長原式

表1 時期区分

な道具をそこで使うことになり、その結果、同一地点の石器構成は多彩になるからである。

従って、通年定住戦略の出現や展開を問うとき、「複合型」遺跡の存在／非存在は、判断材料の一つになる。

本稿では、この「複合型」遺跡の出現頻度や分布地域、立地傾向の推移を問う。そして、通年定住戦略の出現と展開に関する筆者の「主張」の蓋然性を併せて問い直す。

検討の結果、関西地方全域でみたとき、「複合型」遺跡の出現は縄文草創期にあることが判明した。

その後、ある条件下でのみ存在した後、縄文中期後葉以降、関西地方全域で普遍的に出現し始める。

前稿の「主張」は一部訂正しなおす必要があるけれども、同一地点で通年定住し、多角的・複合的に「食料確保活動」するあり方は、やはり縄文中期後葉に普遍化する。以下、詳細を述べる。

2. 対象と方法

(1) 検討の対象

対象時期は、縄文草創期～晩期後半とする。個々

の資料の時期は、表1の区分を用いて示す。

対象地域は、岐阜・福井・京都・兵庫・愛知・三重・滋賀・奈良・大阪・和歌山の10府県とする。

(2) 検討の方法

近年、関西縄文文化研究会諸氏の功績により、関西地方の石器に関する情報の蓄積が進んだ。

傾向の抽出に用いるデータは、原則、この関西縄文文化研究会の資料集(関西縄文研2002~2004)掲載資料から読み取る。ただし必要に応じて、実見したり、出典報告書等に遡って検索・集計する。

対象資料は、ある程度時期が特定できるものとし、その出土合計数が20点以上の資料群に限る。

対象とする石器は、特に食料確保に関わると考える、①石鏃類(石鏃・尖頭器)、②石錘類(切目石錘・打欠石錘)、③磨石(磨石・敲石)・打製石斧類の3グループとする³³。そしてその資料群の構成比を算出し、分析概念としての石器構成類型を次節のように設定する。

なお、この類型の数値が、各遺跡の生業等の実態をそのまま示すわけではない。ここでは「偏りの程度」のみが問題になるので、「偏りの程度」の遺跡間の差異、時間的な推移、地域的な差異を見出すためにこの数値を用いる。

(3) 石器構成類型の設定

今回、約200資料の構成比を算出した(文末図4・表6。文中の遺跡番号とこれらの図表の番号は対応する)。これが、現状で検討できる資料の大半である。これらを、以下のように類型化して傾向を把握する(図1)。

【I(一器種突出)型】特定の器種が突出する。本論では特に触れないが、3細分できる。

I a(石鏃類突出)型

I b(石錘類突出)型

I c(磨石・打製石斧類突出)型

【II(複合)型】複数器種の比率が拮抗する。

なお、突出型と複合型を分かつには、基準が必要である。ここでは、3つの器種グループを取り扱うことから分母を3とし、便宜上、2/3以上を一器種が占めるケースをI(一器種突出)型、それ以外をII(複合)型とする

3. II(複合)型遺跡の出現時期と出現頻度

II(複合)型遺跡の出現はいつか。その出現頻度と推移はいかなるものか。まず、これらの点を整理する。

整理の結果は、図2のとおりである³⁴。I(一器種突出)型遺跡は、草創期から出現する。I b(石錘突出)型遺跡は、やや遅れて縄文早期(後葉/例:滋賀県162赤野井湾遺跡)の出現だが、I a(石鏃突出)型遺跡とI c(磨石類突出)型遺跡は、縄文草創期から存在する。

一方、II(複合)型遺跡の出現は、I型遺跡と同様に草創期である。従って、同一地点で多角的・複合的に「食料確保活動」するあり方は、縄文的石器が出始めた草創期に既に出現していた可能性が指摘できる。

ただし、縄文草創期~縄文前期におけるII(複合)型遺跡の出現頻度は、1~2割程度に留まる。決して主体的なあり方ではない。

とはいえII(複合)型遺跡の出現頻度は次第に高まる傾向にある。特に高まるのは縄文中期中葉で、以降4割程度の頻度がしばらく続く。同一地点での「食料確保活動」の多角化・複合化は、縄文中期により進んだことがうかがえる³⁵。

以上、対象地域全体を俯瞰する形で傾向を抽出した。次に、分布地域や立地傾向の推移に留意しながら、II(複合)型遺跡の出現過程を検討してみる。

4. II(複合)型遺跡の分布地域とその推移

次にII(複合)型遺跡の分布地域の推移を整理する。その結果、縄文中期中葉以前と縄文中期後葉以降で傾向の相違が見出せた(表2)。

(1) 縄文中期中葉以前の傾向

II(複合)型遺跡の主たる分布範囲は対象地域北部で、特に岐阜県で多くみられる。

岐阜県以外では、福井県60烏浜貝塚(草創期)・50古宮遺跡(縄文中期前葉)、京都府68三河宮ノ下遺跡(縄文前期後葉)、兵庫県72月岡古墳下遺跡(縄文中期中葉)、和歌山県190高山寺貝塚(縄文早期中葉)がある。

高山寺貝塚の一例を除き、縄文中期中葉以前のII(複合)型遺跡の分布は、対象地域北部に限られる。

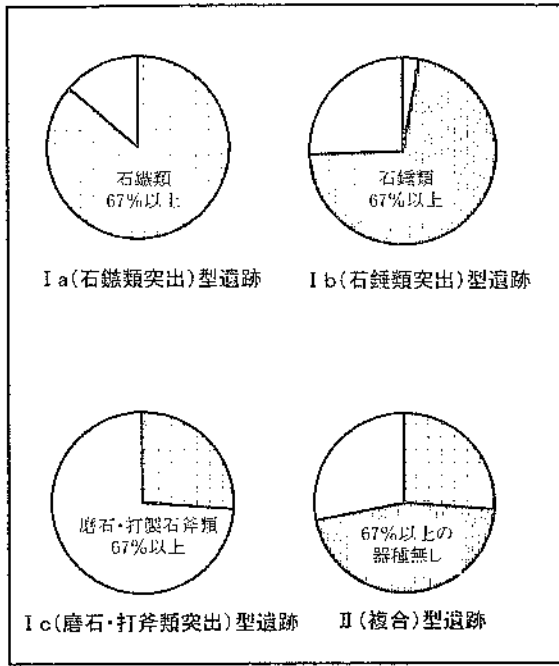


図1 各類型の模式

	I (一器種突出)型遺跡			II(複合)型遺跡	n=
	a 石鏃類型	b 石錘類型	c 磨石 打斧類型		
草創期	82		9	9	11
早期前葉	57	4	26	13	23
前期前葉	73	5		23	22
中期前葉	60	17		33	6
中期中葉		10		90	10
中期後葉	16	13	28	44	32
後期前葉	17	6	29	49	35
中葉	33	5	24	38	21
後葉	44	6	33	17	18
晚期前半	67			33	12
後半	49		27	24	45

図2 各類型の存在頻度の推移 (■=10%)

時期	対象地域北部				対象地域中部～南部				和歌山	
	岐阜	福井	京都	兵庫	愛知	三重	滋賀	奈良		大阪
草創期		1								
早期前葉	1									1
中葉										
後葉	1									
前期前葉										
中葉	2									
後葉	2		1							
中期前葉	1	1								
中葉	8			1						
後葉	8	2		3	2	1		1		
後期前葉	4	1	2		1	2		1	1	
中葉		1			4	1			2	
後葉	2					1		2		
晚期前半					1			2		
後半	2	1			3	1	2		1	

表2 II型遺跡の分布地域の拡散過程

時期	対象地域北部				対象地域中部～南部				和歌山	
	岐阜	福井	京都	兵庫	愛知	三重	滋賀	奈良		大阪
草創期	4				2	4			1	
早期前葉	4			1	1	3		1		
中葉							2			
後葉	2				2	2	1			
前期前葉										
中葉				1	2					
後葉	6	2	1	2			1	1		
中期前葉				1	1		1		1	
中葉					1					
後葉	9	1		1	5		1		1	
後期前葉	6	1	2	2	2			2	3	
中葉	3	2	1	4	2	1				
後葉	1	1		2	4	2			1	
晚期前半					7			1		
後半	1	1		4	12				2	

表3 I型遺跡の分布地域

	沿岸部		平野部	山間部
	複合地	非複合地		
草創期	1			
早期前葉				1
中葉	1			
後葉				1
前期前葉				
中葉				2
後葉				3
中期前葉				2
中葉	1			8
後葉	1		4	9
後期前葉	1		8	8
中葉	2		1	7
後葉				1
晚期前半	2		1	1
後半	1		4	6

表4 II型遺跡の立地の推移

	沿岸部		平野部	山間部
	複合地	非複合地		
草創期			2	8
早期前葉			3	7
中葉	2			
後葉	1	1	2	3
前期前葉				
中葉				3
後葉	4		1	8
中期前葉	3		1	
中葉	1			
後葉	2		3	13
後期前葉	1		4	11
中葉	3		3	7
後葉	2		5	6
晚期前半	1		4	3
後半	2		9	8

表5 I型遺跡の立地の推移

一方、同段階のⅠ（一器種突出）型遺跡は、表3に示したように、対象地域のほぼ全域で普遍的に存在している。そのあり方と比べると、Ⅱ（複合）型遺跡の分布範囲の限定性はより強調できるだろう。

（2）縄文中期後葉以降の傾向

縄文中期後葉になると、傾向は一変する。対象地域の中部・南部の府県にも、Ⅱ（複合）型遺跡が目立ち始める。

同一地点で多角的・複合的に「食料確保活動」するあり方は、縄文中期後葉に対象地域全体に拡散し、普遍化したことがうかがえる。

5. Ⅱ（複合）型遺跡の立地傾向とその推移

（1）地形区分とそれぞれの特性

ここでは地形を巨視的に区分し、沿岸部・平野部・山間部に大別する。

山間部とその資源の特性

勾配が2%以上の地点を指す。森林資源に恵まれるので、堅果類が稔る秋～初冬に食料資源量が大きく増加する。その反面、緑映える春～夏には食料資源量が減少する一面も持つ。

平野部とその資源の特性

勾配が2%未満の地点を指す。上半部の扇状地・段丘・台地などは森林資源に覆われるので、山間部と同様な食料資源の内容をもち、その量も同様な季節的変化をする。

しかし、下半部の沖積（氾濫）平野は、湿地林が展開するものの、堅果類を育む森林資源には恵まれない。秋～初冬に食料資源量がとくに増大するわけではない。

沿岸部とその資源の特性

現汀線より約2km圏内を指し、魚介類に恵まれる地帯に該当する。食料資源量の季節的変化は、山間部や平野部上半とは対をなす。

秋～冬、魚介類は沖合や深場といった人の手から離れた地点に潜み獲得しにくい。

一方、水温が上がる春～夏には産卵等のために浅瀬に大挙して押し寄せ、人の手にかかりやすくなる。そのため、沿岸部の食料資源量は春～夏に増大する。

なお、この沿岸部は「複合地」と「被複合地」に細分する。

複合地は、沿岸部と山間部の接点を指す。春～夏に量的ピークを迎える魚介類と、秋～冬に量的ピークを迎える堅果類の双方を同一地点で利用できる。年間を通じて食料資源に恵まれる良好なポイントである。

非複合地は、山間部に接しない沿岸部を指す。接するのは秋になっても恵みが特に増えない沖積（氾濫）平野なので、春～夏は魚介類に恵まれるものの、秋～冬の食料確保には難がある。

（2）Ⅱ（複合）型遺跡の立地傾向とその推移

以上の区分を踏まえ、Ⅱ（複合）型遺跡の立地傾向とその推移を表4に示した。ここでも縄文中期中葉以前と、縄文中期後葉以降で傾向が異なる。

縄文中期中葉以前の傾向

Ⅱ（複合）型遺跡の立地は、沿岸部複合地か山間部に限られる。

山間部の遺跡としては、岐阜県11西田遺跡、福井県50古宮遺跡、京都府68三河宮ノ下遺跡などがある。既に述べたとおり、いずれも対象地域北部の遺跡である。

沿岸部複合地の遺跡としては、縄文草創期の福井県60鳥浜貝塚、縄文早期中葉の和歌山県190高山寺貝塚、縄文中期中葉の兵庫県72月岡古墳下遺跡である。

当該期の大半のⅡ（複合）型遺跡が対象地域北部に分布する。そのようななか、高山寺貝塚は例外的に対象地域南部に位置する。これは年間を通して食料資源を確保し易い沿岸部複合地に立地していたからだと考える。

なお、同段階のⅠ（一器種突出）型遺跡は、表5に示したように、平野部にも普通に存在している。そのあり方と比べると、この時期のⅡ（複合）型遺跡の立地傾向がより限定的なことは明白である。

縄文中期後葉以降の傾向

沿岸部複合地や山間部に加え、平野部でもⅡ（複合）型遺跡が形成され始める。滋賀県156小川原遺跡・157正楽寺遺跡（縄文後期前葉）、大阪府178野畑遺跡（縄文中期後葉・後期前葉）、奈良県173西坊城遺跡（晩期前半）などがその典型である。

縄文中期後葉になると、多角的・複合的な「食料確保活動」の拠点は、平野部でも形成され始める。

6. 結論

関西地方全域を対象に、石器構成の偏りが少ないⅡ（複合）型遺跡がいつ出現し、そのあり方がどう展開したのかを問うた。

その結果、以下の諸点が見出せた。

- ・Ⅱ（複合）型遺跡は草創期から現れる。
- ・ただし、縄文中期中葉までは対象地域北部にほぼ限って現れる。北部以外にも若干例がみられるが、それは複合的環境に限られる。
- ・縄文時代中期後葉以降、複合型遺跡の分布が広がる。対象地域の中部・南部の府県にも、Ⅱ（複合）型遺跡が出現し始める。また、それまでみられなかった平野部にも、Ⅱ（複合）型遺跡が立地するようになる。

既に触れたとおり、地形ごとに食料資源の内容は異なる。また、中緯度温帯に位置するので、食料資源量は季節的に変化する。

関西縄文社会は、この季節的变化を乗り越えるために、少なくとも3つの生業＝居住戦略を採った。

第1の戦略は、季節的に居住地を替える方法である（図3-(3)）。春～夏は沿岸部に居住して魚介類を漁る。魚介類が去った後は、森林資源地帯に移動して堅果類を利用し、年間の食料資源を確保する。季節ごとに旬の食料を求めて移動し、逗留地点ごとに異なる食料確保活動をし、食いつなぐ方法である。

第2の戦略は、沿岸部複合地に居住する方法である（図3-(4)）。春～夏は目の前の沿岸部で魚介類を漁り、魚介類が去った後の秋～冬は裏山の堅果類を活用して、年間の食料資源を確保する¹⁵⁾。

第3の戦略は、貯蔵経済に依拠する方法である（図3-(5)）。森林資源地帯に堅果類の貯蔵拠点を設け、貯蔵物で年間の食料の主幹をまかないつつ通年定住する。そして、この拠点を季節に応じた食料確保活動を多角的・複合的に繰り広げる戦略である。

このうち、第1と第2の戦略は縄文早期前葉から、第3の戦略は縄文中期後葉から顕在化する。筆者はそのようなモデルを提示してきた¹⁶⁾。

ところで、本稿で取り扱ってきたⅠ（一器種突出）型遺跡の多くは、第1の戦略（季節的定住）の結果だと考える。というのも、食料資源の内容と量の季節的变化に応じて、逗留先を移動させた結果、各地

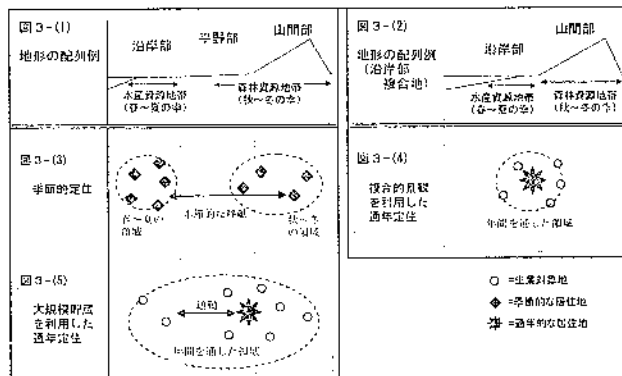


図3 (1)・(2)地形の配列例と(3)～(5) 生業＝居住戦略モデル

点の石器構成が偏ったと考えられるからである¹⁷⁾。

一方で、Ⅱ（複合）型遺跡は、第2・第3の戦略の結果だと考える。というのも、同一地点に通年定住して食料資源の季節的变化を乗り越えていたからこそ、同一地点の石器構成が偏らなかったからである。

このような立場から、Ⅱ（複合）型遺跡の出現と展開を追ったとき、当該地方の通年定住戦略の拡散過程は以下のように想定できる。

Ⅱ（複合）型遺跡の出現は草創期である。従って、同一地点で複合的・多角的に食料確保して季節的变化を乗り越え、そこで通年定住する戦略は草創期から存在していた可能性が高い。

ただし当初、その戦略は限られた地域・立地に存在するものだった。対象地域北部¹⁸⁾や、年間の食料資源を同一地点で確保し易い「沿岸部複合地」にそのありかが限られるからである。

ところが、縄文中期後葉になるとⅡ（複合）型遺跡の分布は広がる。分布範囲は対象地域中部～南部に拡散し、平野部に立地するケースも新たに現れる。通年定住戦略を採る地域は拡大し、通年定住が可能な立地も増えた可能性が示唆される。

さて、前稿で提示したモデルは、「縄文中期後葉に通年定住戦略が普遍化・顕在化する」といったものだった¹⁹⁾。ここでは、本稿の成果をもとに見直しと補強を加え、以下のような可能性を結論として提示しなおす。

——同一地点で複合的・多角的に食料を確保する

ことで季節的変化を乗り越え、そこで通年定住する戦略は、縄文草創期に出現する。それは対象地域北部、あるいは年間を通して食料が確保し易い沿岸部複合地にまず現れる。縄文中期後葉になるとその戦略は対象地域全体に拡散し、普遍化する。

謝辞

調査成果を県民に還元し、活用していただくには、堅実な調査とともに、調査成果を歴史像にまで昇華させるための基礎的研究が不可欠である。本稿はその基礎的研究として草した。

このような本稿を草するにあたり、奈良大学植野浩三先生ほか、和気清章氏等には建設的なご意見を頂いた。また、勾配分布図の作成にあたり、東京工業大学大学院阿古雄之氏の協力を得た。感謝します。

註

- (1) 瀬口眞司「関西縄文社会とその生業」『考古学研究』第198号 考古学研究会2003ほか
- (2) なお、石匙、スクレイパー、石錐、楔形石器、磨製石斧などについては、今回の検討対象資料には含まない。また、石皿、石核、M.F.、R.F.、および木製品や骨角器も対象から省く。これらは調査担当者によって取り扱いが大きく異なったり、地点ごとの遺存状態の偏差が著しいため、遺跡間の比較検討には組み入れにくいからである。
- (3) 草創期～前期は資料数が少ないので、大別時期区分ごとではなく、草創期、早期、前期の3区分に統合して数値を示す。
- (4) ただし、変化は再度訪れる。縄文後期後葉になるとⅡ型遺跡の出現頻度はやや減少する。「食料確保活動」の戦略に若干の変化があった可能性が垣間見える。この点については、再度検討しなおしたい。
- (5) 瀬口眞司「琵琶湖周辺における縄文社会の景観利用戦略とその遷移」『縄文社会をめぐるシンポジウムⅡ－景観と

なお、本稿準備中に那須孝悌先生（大阪市立自然史博物館）が亡くなられた。大津市栗津湖底遺跡の現地調査、続く報告書作成業務に、先生は指導委員として携わってくださった。奉職間もない当時の筆者は右も左も分からず、頑張りたい気持ちが空回りして失敗ばかりする中、ぐうの音も出ぬほど先生は厳しく叱りつけて下さる反面、慈しみ深い眼差しと指導を注いで下さった。

「宿命を人類はどう乗り越えてきたのか？」――私のこの大事なテーマを生み出すゆりかごは、先生が自然史学者として、あるいは人生の先達としてつくって下さった。このご恩に報いられるよう努めていきたい。――先生のご冥福を祈り、拙稿を捧ぐ。

（せぐち しんじ：企画調査課 主任）

遺跡－予稿集』縄文社会研究会2004ほか

- (6) 註1に同じ。
- (7) ただし、ほかの可能性を持つ遺跡も多い。通年定住する場合でも、しばしば存在が想定される「出先地」では特定の活動がなされがちなので偏った石器構成になる可能性が高い。従って、縄文中期後葉以降のⅠ（一器種突出）型遺跡の中には通年定住戦略下の「出先地」も含まれると考えられる。
- (8) 北部地域で先駆けてⅡ（複合）型遺跡が出現する理由は見出せていない。東日本に接した岐阜県で特に該期のⅡ（複合）型遺跡が多いことから、東日本からの影響と答えることも可能だが、その実態究明は今後の課題である。降雪量の多さや冬の長さが貯蔵経済の成長を促し、それが通年定住戦略への展開を早めた可能性などが考えられるが、生態的特性やサケ科魚類をはじめとする各種食料資源の活用・保存技術の検討などから答えを見出していきたい。
- (9) 註1に同じ。

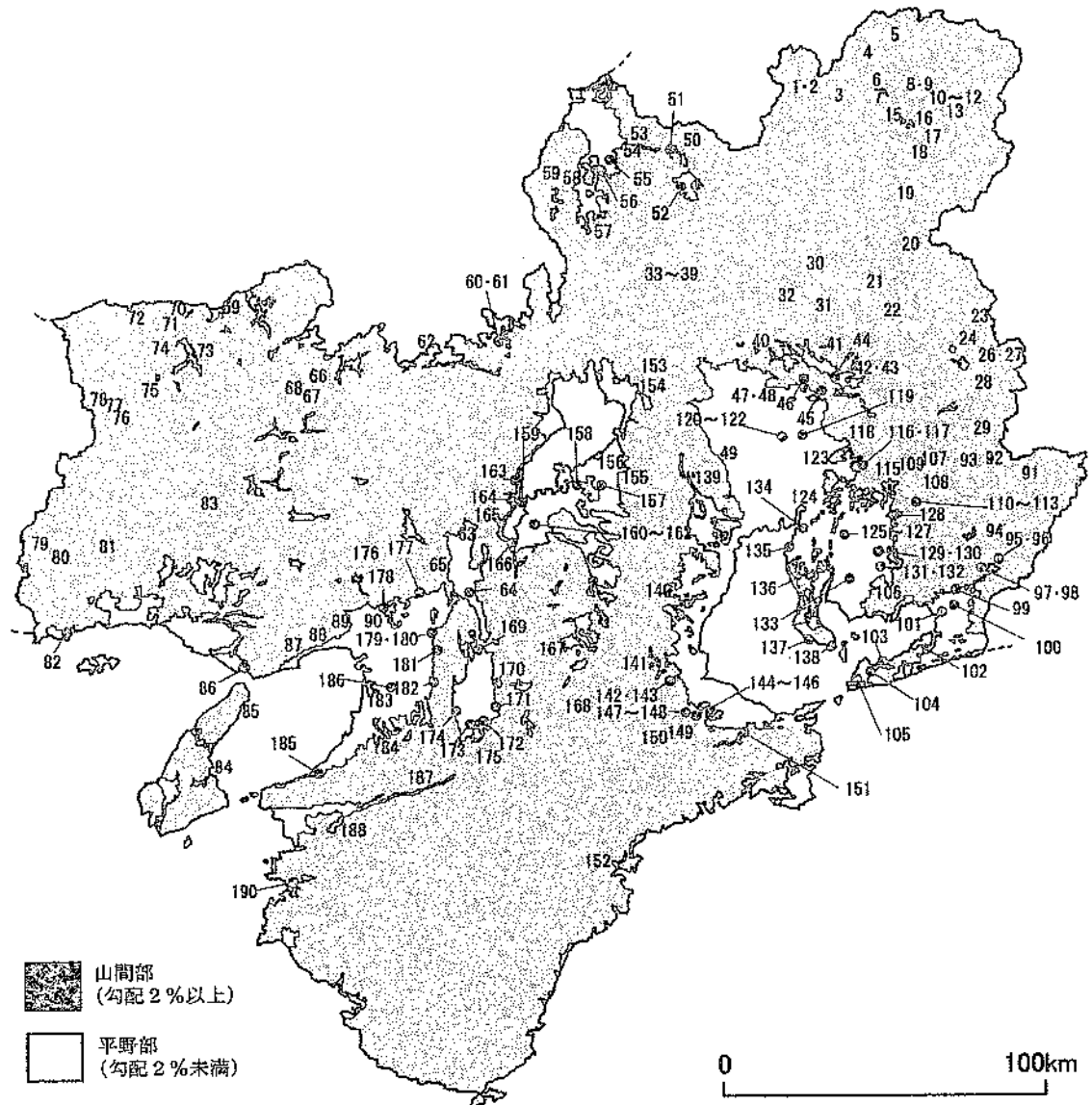


図 4 対象遺跡位置図

編集後記

紀要第18号をお届けします。今号は7本の原稿を掲載することができました。内容は縄文時代から現代におよび、中でも昭和初期の埋蔵文化財をめぐる状況の一端を明らかにした論考は、古い時代を対象にしている考古学も、現代史から自由ではないということを、改めて考えさせてくれるものです。

この紀要を職員の研究活動の成果として、今後もさらに研鑽を積んでいきたいと考えておりますので、みなさまからの積極的なご叱正・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(M.K.)

平成17年(2005年)3月

紀 要 第18号

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会
滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL (077)548-9780
FAX (077)543-1525
URL: <http://www.shiga-bunkazai.jp>
E-mail: mail@shiga-bunkazai.jp
印刷・製本 富士出版印刷株式会社